

シリーズ～人工股関節置換術②

整形外科部長 池田 登



本号では、前号で紹介した人工股関節について、その手術の現状、その後の生活について紹介いたします。

4. 人工関節手術の実際

実際の手術時間は1時間半から3時間くらいです。難しい入れ替えの手術ではさらに時間がかかることがあります。

皮膚の切開の大きさについては、昨今整形外科で話題となっていますが、当院では15センチほど皮膚を切って手術を行っています。これは親指とひとさし指を広げた長さです。やせている人ではもう少し短め、太っている人ではもう少し長めなることもあります。もっと小さな皮膚切開でもっと早く手術ができないかという要望もありますが、できるだけ丁寧に確実な手術を行わせて頂いているので、上記の時間と皮膚切開の大きさが必要と考えています。

当院では年間100例を超える人工股関節手術を行っています。これはマスコミ誌上の人工関節ランキングでは、全国で常にトップテンに入っています。経験豊富な医師が丁寧に確実な手術を心がけて行っています。

手術はクリーンルームという特殊な設備が施された部屋で行われております。人工股関節の致命傷と言われる感染症の発生は、過去10年間、当院で人工股関節置換術をはじめてうけた患者さんにはおられません。きわめて稀に手術後の脱臼はありますが、患者さんが転倒したり、無理な肢位を強制されたりした場合にのみ発生しており、脱臼がくせになった患者さんはやはり過去10年間、当院ではじめて人工股関節置換術を受けた患者さんにはおられません。

5. 人工股関節の耐久性

最近、当院で行われた初期の人工股関節で20年以上経過した患者さんの検診結果をまとめました。手術を受けられた方は125人おられましたが、39人が死亡されており、32人を検診できました。手術を受けた時の年齢は26歳から64歳、平均46歳でした。そのなかで再手術を受けた人の割合は27%で7割以上の方が20年以上再手術なく生活されておりました。ただそのうち2割の人がレントゲンでは人工関節



クリーンルームでの手術の様子

のゆるみを認め、再手術が必要と思われました。つまり10人のうち6人は当時の人工材料と手術技術で問題なく20年以上生活していたということです。いまでは、人工関節の素材やそれを固定するセメントの進歩、セメントレス人工関節の開発、さらには手術を行う整形外科医の技術も向上しており、この数字はもっと高くなり、ほとんどの人が20年以上普通の生活ができるものと考えています。

6. 検診の重要性

図11は51歳の時に手術が行われ、現在75歳になられている患者さんのレントゲン写真です。全く痛みもなく、レントゲンでもセメントはしっかりと骨に固定されており、ポリエチレンの摩耗もわずかです。上記5に書いた20年以上の成績やこの長期経過例などの情報は手術をする側にとっても、受ける側にとっても重要です。よく患者さんから「人工関節って何年もつのですか」といった質問を受けます。この答えを出すのは手術を受けた患者さんしかいません。また痛みがなくても、レントゲンを撮れば、人工関節のゆるみが進んでいる場合もしばしば経験しています。手術を受けられた方は、年に1回は必ず病院を受診してレントゲンを撮って医師の診察を受けてください。



図11-1:手術時(51歳当時)



図11-2:75歳時

最後に、人工関節の発展は医者の研究だけでなく、手術を受けられた患者さんの協力なしにはありえないということを強調してこの稿を終わります。

